

第15号

アクトス

文芸集団 ACTOS

平成二十四年八月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしづく

大西亥一郎

※アラトス(Aratos)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによって、文学と峻別される。言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験を必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の思考・情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがって、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」「心に響く」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能内容を高めねばならない。

本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型(詩・柳歌・短歌・俳句・川柳)・小説・随筆・児童文学・紀行・評論などのすべての文芸ジャンルを含む。

多くの方の参加と、関係各位の協力を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス会長・編集長 大西 亥



目次

梶井基次郎はハンサムである	小野村 新	1	
鴨川閑話 Ⅱ 胃弱亭	骨人	8	
花、いろいろ	高阪博一	14	
慟哭	水田竜子	22	
科学と思考	大西隆史	28	
白蝶の群れ	彩 華	31	
生ゴミ男	大西亥一郎	32	
アクトス写真館		55	
シヨートシヨート	ことぶき大学	高阪博一	56
ご紹介	原稿応募先	58	
編集室から		67	

梶根基次郎はハンサムである

小野村 新

三月二十四日は、梶根基次郎の命日である。久しぶりに、レモン忌に出席するため、大阪谷町の常国寺にやって来た。

桜の花が満開間近の大阪の街には、思考力を緩ませるようなこの時期特有の空気が漂っていた。平年よりも十日も早い開花宣言をもたらし、昨日までの陽気が一転して、寒風が肌に冷たいあいにくの日曜日になつてしまつたが、花見に出かける多くのグループを見かけた。

桜といえ、梶根基次郎である。彼は桜

の花がどうしてあんなに美しく咲くのか信じられないので不安だつた。ある日、その理由を理解することができた。桜の樹の下には死体が埋まっているから、だからあんなにもみごとに咲くことができるのだ。

爛漫と咲き乱れている桜の樹の下には、馬や犬や人間やの死体が埋まつており、それらの腐乱した死体が垂らしている液体を、桜の花が養分として吸い上げているというのだ。桜の花が妖しいまでに美しく咲く理由の説明として、これ以上の説得力のある発想を私は知らない。

常国寺の座敷には、すでに二十人ばかりの人が着席していた。みんな墓参りをし

た。常国寺の墓地は本堂と隣接しており、

堀を隔てて、周囲三方を高層ビルに囲まれ

ている。墓地というものは山の麓や海浜の段

丘に存するもので、いつも吹く風にさらされ

ているという印象が私には強い。しかし、常

国寺の墓地は屹立するビル群に囲まれ、そ

れらによつて保護されているかのように、静

かに整然と存在している。ちようどお彼岸

の時期にあたるので、どの墓も美しい花が飾

られ、こぎれいに清掃されている。色とりど

りのカーネーションや菊の花で飾られている

のは他の墓と同様なのであるが、梶井の墓

は供えられた一穎の色鮮やかなレモンのた

め、数ある墓の中でも異彩を放ち、その存

在感を際立たせている。

墓石正面に中谷孝雄の筆跡で「梶井基

次郎墓」と深く刻字されている。裏面に、

「昭和五十年建之施主梶井謙一」とある。

その傍らに、「泰山院基道信仕靈祥月忌追

善供養 施主レモン忌参詣者一同」の木の

長札が立てかけられている。

住職の読経が流れる中、ひとりずつ焼香

をする。いつの間によつてきたのか、向かい側

のブロック塀の上に一匹の白い猫が居座つて

いる。妙に堂々とした落ち着いたようすの猫

で、この人たちは何をしているんかいなあ、と

いつた風情で我々を見下ろしている。以前

も同じ場所から白い猫が我々をながめてい

たことがあつたが、その時と同じ猫なのか。

墓参の後、座敷に腰を据え、恒例の雑談会となつた。自己紹介を兼ねて、梶井についての思いを一人一人が自由に話すのである。私はまむしのことを話した。梶井が淀野隆三に宛てた手紙の中に、まむしを食べる記述がある。梶井が晩年、伊丹の兄謙一の家に住んでいた頃のことである。家の庭にまむしが出て、そのまむしを近所の人が殺し、少し離れた草むらに捨てた。その話を梶井が聞きつけ、弟の勇にまむしを拾つてきてくれるように頼んだが断られ、仕方なく母のひさが拾つてきた。梶井はそのまままむしの皮をはぎ、兄や弟が止めるのも聞かず、心

臓と肝臓を生で呑み、肉は干物にして毎日一寸程ずつ食つた。その一ヶ月半後、今度は、友人が自宅で飼いたらせて持つてきてくれた、前の時とは比べ物にならない程太いまむしの二つの肝と脾臓を飲み込んでいる。吐きそうであつたが、我慢したのでないが、いけなかつたらしく、二、三日すると、喉の奥がかゆくてたまらなくなつてきた。瘤ができ、肛門がかゆくなり、とうとう小便が出なくなつてしまつた。医者は、まむしの肝の食ひすぎの腎臓炎という診断をくだした。

基次郎がまむしの内臓を呑んだのは、やむにやまれぬ切つ羽づまつた思いからであつ

たと考えられる。この頃の体調は、思わしくなく、三好達治に宛てた手紙に、「一、二年の寿命」という記述まで見えるほどであった。そこで、結核に効能絶大と信じたまむしを食ったのであろう。

早く元氣を取り戻したかった。そして、書かねばならなかったのだ。作家としてのすさまじいまでの執念を見て、そら怖ろしい思いに捉えられるが、それにしてもよくまむしなごを。そういったところにも彼の非凡な、それこそグロテスクを恐れない悪魔的な感性の発露が見てとれるのか……。そのようなことを私は訥々と話してみた。

話し終えると、Iさんが補足説明をしてくださった。Iさんは、梶井の大ファンで、それこそ万難を排して毎年レモン忌に出席されてきた方である。この時期にはけっこう多い慶弔事を差し置いてレモン忌に参加したこともあり、親戚づきあいに義理を欠いたと家族から責められた体験もおありらしい。そのIさんが以前、レモン忌に出席されていた梶井の弟の奥さんである豊子さんから直接、マムシに関する話を聞かれたのである。私はIさんの話から、梶井の手紙の文面からだけでは察することのできなかつた事実をいくつか知った。その中で最も驚かされたのは、まむしをさばいたのが基次郎ではな

く、母親のひさだったということだ。基次郎を何度も説得したひさであったが、それ以上執拗だった基次郎の頼みに根負けし、まむしを拾つてきて、料理までしたという。やりきれない思いを我慢して基次郎の願いを聞き入れているひさの姿が眼前に浮かぶようである。

基次郎の死期が近づいた頃、ひさは彼を諭すように責めたそうである。(おまえがまむしの内臓など呑むから、こんなにも早くひどい衰弱を招いたのだよ)という理由で。ひさが自らまむしをさばいたことと死期の迫った基次郎を叱り責めたことを、Iさんの話によつて初めて知つたのであつた。

私は今回で合計七回レモン忌に出席したことになるのであるが、最も印象深い記憶として残っているのは、一九八九年、はじめてレモン忌に出席した時のことである。この頃は、中谷孝夫・英子夫妻、梶井の甥夫婦、梶井の弟の奥さんである豊子さん、『青空』同人の北神さん、三好達治の次男の奥さんなど、梶井の親族や梶井を直接見知っている人たちが出席されていた。

このレモン忌の雑談会で、梶井の顔のことが話題になった。詩人の杉山平一氏が梶井の顔のことを、「ねい、もうな顔というんですよ」と笑いながら説明されたことがきっかけ

だった。梶井の代表作品の『檸檬』を音読みすれば「ねいもう」となる。「ねいもう」という語感、妙に梶井の顔の特徴を言い得ているから不思議である。のつべりとしてとらえどころがないのであるが、したたかな何かを持つているような顔。

梶井の容貌については、さまざま形容や比喩がなされている。「容貌魁偉」、「ごくくてもむさくるしい」、「憂鬱な墓のような顔」、「きささくなゴリラのよう」とたとえた作家もいる。お世辞にも美男子とは言えない表現ばかりであるが、「一見いかつい顔をしていたが、笑うと目が細くなり、本当にやさしい、いい笑顔だった」「梶井はあの厳しい顔

に、実に人懐かしい微笑を浮かべた」と、親交のあった作家たちは彼の魅力的な笑顔について述懐している。

最後に、梶井の生涯の友であり続けた中谷孝夫氏が、しみじみとした口調でこうまとめられた。「梶井はいかついけれど、実味のあるいい顔をしていましたよ」初見は醜男に見えても、付き合っているうちにじわじわと内面からその魅力が滲み出てくる、そのような顔を梶井はしていた、と。

この中谷孝夫氏と外村茂の二人が梶井を囲み、寄り添うようにして写っている三高時代の写真が私は好きである。外村は梶井の右脇に手を差し入れ、中谷は立った姿勢

で両手を梶井の左肩に置いている。梶井は二の腕を組み、柔らかな微笑で正面を見据えている。東大に進学が決まった時の卒業記念写真である。三人の表情には、安堵感の奥に、秘められた将来への決意のようなのを感じられる。音楽や美術を愛し、トルストイと漱石を読みふけり、「三高には、梶井というすごい奴がおるらしいぞ」と噂されていた二十三歳の頃の写真である。

先日、梶井がシンフォニーの総譜も読めるほどの音楽通だったことなど思い浮かべながら、マーラーの「巨人」を聴いていた時、突然私の口について出た言葉があつた。それは、「梶井基次郎はハンサムである」というも

のだった。梶井の文章を通して、彼の人間的魅力に触れ続けてきた私自身の中で、徐々に醸成されてきたこの言葉は、私の心の底にしつかりと位置を占め、消えないものとなった。



「鴨川閑話」Ⅱ

胃弱亭 骨人

今年もまた、骨人にとつて忌まわしい夏の季節とともに、アクトス原稿のメ切も迫つて来る。僕は以前程の頻度ではないものの、相変わらずの鴨川通いを続けている。

さて、退職後はめつきり人と接する機会の減つた僕にとつて、気になる人物のひとり、アクトス10号の中で触れた、あの高貴なるホームレスである。

彼は今も健在で、時には僕の指定席(ベンチ)を占拠しながら鴨川を放浪している。付近にトイレや水場や大きなゴミ箱のあるそのベンチは、放浪する彼にとつても格好の基地となっているのであろう。ことに大きなゴミ箱はホームレスにとつては生活用品を物色するのに誠に都合がよいと言える。

ところで、僕は去年の秋から今年にかけてあのホームレスと幾度かの接触をもつことができたので、前号に続き少し触れてみたい。

鴨川の桜も紅く色づきだしたある朝、僕はいつものように自転車を走らせていると、川辺

を掃除する近所の老人達に交じつて、何と、あの彼が箒を手につせと掃除する姿に出くわした。予期せぬ光景に一瞬たじろぎ、言葉をかけることも出来なかつたが、彼が尋常のホームレスではないということを確信した思いで、僕の心は温かくなつた。

その数日後、僕はついに彼と接触をもつことができた。

晩秋の日溜まりが心地好い午後であつた。僕は鴨川を散歩する途中、いつものベンチに、最初に見かけた頃に比べ倍程の荷物を脇に、腰かけている彼を見つけた。私は思いきつて隣のベンチに座り、それとなく彼の様子を伺いながら、話しかける言葉を探つていた。すると、いつの間にか記したのであろうか、彼が一枚の紙片を私にさし出してきた。僕は驚き紙面に目をやると、そこには身なりとは不釣り合いに高度な漢字を駆使し、形の整つた文字がきれいに並んでいる。内容は、自分の荷物をここに放置しておく、市の条例によつて撤去されてしまうであろうかという危惧が記されていた。僕はとりあえずその余白に、その心配は十分にあることを記して彼に渡した。彼は無言で目を通し納得した様子であつた。結局この日は口を聞くことなく筆談で終わつたが、僕にとつては大きな進展であつた。後日、鴨川沿いの古いお屋敷の塀際に、端正な文字で「この荷物を勝手に撤去しないで下さい。」と、貼り紙された彼の荷物が置かれているのを見かけたことがある。

そろそろ鴨川も冬支度を始めた十二月、僕は家の整理をしたついでに、いらなくなつたり

ユツクの一つを鴨川のゴミ箱に捨てようと自転車を走らせていたら、偶然、前より更に膨れ上がった荷物に囲まれるように彼が例のベンチに座つているのを見つけた。僕は思わず捨てるつもりのリユツクを持つて彼のそばに行き、前回の筆談の件はすっかり忘れ、ごく自然に、「このリユツク、僕はもう使いませんので、よかつたらどうですか？」と、彼に差し出した。すると、少し驚いた表情の彼の口から、聞き取れない程の小さな声で「アリガトウ……」（確かに僕にはそう聞き取れた）と、発せられた。僕は初めて耳にした彼の言葉に半ば興奮し、「僕はこの近くに住んでいるので、又、何かいいものがあれば持つて来ますよ」と言つたような事を一方的にしやべり、そそくさとその場を立ち去つた。その時の僕にとつてはそれが精一杯の行動であつたと思う。とにかく彼と口を聞いたのはこれが最初であつた。

それから長い冬に入り、昨年からは僕のトレーニング場所も鴨川から西京極のトラックに移つていたことも重なつて、鴨川へ出ることがめつきり減つた。時たま自転車で鴨川を走ることとはあつたが、彼らしい人影を見かける事はなかつた。この長い冬の間、彼は何処でどう過ごしているのであろうか……。

鴨川にもようやく春が訪れ、花見客やあおい葵祭の喧騒も去つた五月のある夕方。僕は珍しく冬の間は全く着ることのなかつた厚手の皮のジャケットを着て、朝夕まだ寒さの残る鴨川に出かけた。薄暮の中、前にも増して膨れ上がった二つの荷物の山に埋もれるようにベンチに

もたれかかった彼の姿を発見した。どうやらこのベンチで夜を越そうといった風情である。最初に見かけた頃の高貴な雰囲気は消え去り、ゴミともとれる大きな荷物に埋もれた彼の姿は完璧にホームレスそのものであった。私はここまで自転車を走らせて、やや火照りの残った体から重い皮のジャケットを脱ぎ、手に持つて、「お元氣ですか、夜はまだ冷えますね。」と軽くあいさつしながら、「このジャケット、若い頃に買ったものですが、随分と重くてね、最近はずいていないんです、でも丈夫な皮で結構暖かいですよ。よかつたらどうですか？、もし氣に入らなければ処分してもらつて結構ですよ。」と、一方的にまくしたてた。言つてしまつてから僕は、自分の着古しをくれてやるという見下した行為は、彼に屈辱感を与えはしなかつたかと不安がよぎつたが、存外彼は氣に入つたようで、「ありがとうございます」と、前回よりも聞き取りやすい声でそう言つた。そして、彼は服をまさぐりながら、「これは牛の皮ですか？」と問う、僕は「いや、羊の皮ですよ、柔らかいでしょう。………：会話はそれ以上弾むこともなく、沈黙を紛らわそうと、僕はポケットから煙草を取り出した。すると、「煙草を吸われるんですか。」と言つて、彼は自分のバックの中から煙草を一箱取り出して僕に差し出した。思いがけぬ彼からの返礼に僕は大仰に「ありがとう！」と言ひ、受け取つてケースを見ると Marlboro の タール 8 mg、ニコチン 0.9 mg の僕にとつては結構きつい煙草で、中を開けると一本だけ入つていた。彼に悟られぬようにそつと自分の煙草とすりかえて火をつけた。ほの暗い

中に一瞬彼の端正な横顔が浮かび上がった。恐らくそこらで拾ったものであろうが、彼とのコミュニケーションが嬉しくて、煙草をくゆらしながらも、沈黙に耐え切れずに僕は、以前から気になつていたことをつい口ばしつてしまった。「夜は何処でどうされているんですか？」と。とたんに彼はそれまでの落ち着いた様子から一変し、急に出かける用事でも思い出したというようにそわそわし始めた。もう暗くなりだし鴨川を今から何処へ行こうというのか。ありもしない時計を捜して時間を気にするふりをしながらも一向にベンチを立つ気配のない彼の、このとつてつけたようなしぐさに僕は初めて気づいた。彼のこの矛盾したしぐさは、昼間は僕の指定席となつているこのベンチを占有していることへの遠慮が、否、このベンチを今宵の宿とすることを知られたくない彼のプライドがそうさせているのだ！

どう考えても、こんな時刻、今夜は恐らくこのベンチで夜を越そうという態勢であつたはずだ。好意でかけた言葉がかえつて彼をこの場所に居づらくさせてしまったのだ。僕がここに居ることが彼の負担になつていのではないか。今は早くここを立ち去るべきだと感じた僕は、「もう夜になるし、このベンチを使う人もいないでしょう。ゆつくりされたらいいですよ。」と、とりつくろいながら、どこか具合の悪い所はないか、何か必要なものはないかといったようなことを話し、又の再会を約束して、僕はベンチを後にした。薄暗い中、その表情はよくつかめなかつたが、以前より少しやつれたその横顔には、長く厳しい冬に耐えてきた疲労感のはつ

きりと見てとれた。

数日後、自転車を走らせながら、いつものベンチの近くに彼の荷物を見つけた。その荷物の中に、僕のリュックと皮のジャケットがきちんとたたまれて置かれているのを確認し、何故か僕はほっとした。

鴨川にはもうむせかえるような夏の日射しが感じられだし、骨人の食欲もいよいよ減退してきた。今度彼に出会ったら、「僕はもう食べられないんですが、よかつたらどうですか？」と言って、特上の鰻丼でも提供してみようか……。

完



ペイジョン画

花、いろいろ

高阪博一

この歳になると、目をやるものが変わるようだ。昔は犬や猫などの小動物、街路樹や道端の植物に、興味を持つことは殆んどなかった。「あれれ、居てるやないか」「あれれ、咲いているやないか」程度だった。

この七月で満六十五歳になる。これで高齢者の仲間入りだ。まあ、よく生きたものだと思う。ぼんやりと、六十五歳になって、残り時間を考えてみる。あと三分の一で八十五歳、そこまではないような気がする。こうなると命というものがいとおいしい。残り少

ないと惜しい気持ちにひとはなるものだ。

そうかと言って、「人が老いるとはどのようなことなのか」「人は何故生きなければならぬのか」「生きる価値はどこにあるのか」というような難しいことを考えたことはない。ただ、健気に生きているものにとおしさを感じ、その健気さに心惹かれるということなのだ。特に、花を注意して見ているのに気付く。

わたしは、ほぼ毎日散歩をする。近所に整備された遊歩道があるからだ、それに木々の多い公園も。一日に六十分前後、概ね十分につき千歩弱のペースで歩く。どちらかと言えば、ゆつくりだ。速いペースだと、心

臆が悲鳴を上げるからだ。

歩き始めた頃は、単に歩くだけだった。春が過ぎ、蟬のなく夏が来て、色鮮やかな秋が過ぎると、モノトーンの冬が来る。単に歩くだけの身に、季節の移り変りはない。一年など同じ日の積み重ねでしかない。わたしには、桜も紅葉もない。同じ植物でしかなかった。

二年目の或る春の夕暮れ、いつものように、いつものペースで散歩していた。そよ風が心地よく、頬を撫でていた。ふと見ると、目の前に桜が、はらはらと散っている。逆光に舞い散る白い花びら達、陽にキラキラ輝いて、最後の命を燃やしているように思えた。

それからだろうか、花に興味を持つようになったは。単に歩くだけではなく、見ようとして歩くようになった。花が美しいものだとは知っていた。やつと、花の美しさを実感出来るようになった。花の健気さも分かるようになった。

そうなつてくると、女房に花の名前を聞くようになった。だが、歳がいくということとは悲しいことだ。名前がなかなか覚えられない。それでも、何回か同じ事を聞くうちに名前とその花とが一致するようになった。

三年目に入ると、散歩道の花の名前が聞かないでも、分かるようになった。また、ネームプレートも整備されるようになった。

この頃になると、美しい花が萎れて枯れて、褐色に変色していくのが、それ程汚いとは思わなくなっていた。巡りくる次の時のために、短い命を精一杯、生きていると思うようになっていた。

さて、今年で散歩も五年目である。この出不精のひとがよく歩くものだと思う。一日に五、六千歩、歩いているのだから、相当なものだと自分では思っているが……。

今年もいろいろな花たちに出会った。その花たちの姿を書いてみたいと思う。自分の命を尽くして生き、また巡る季節に、甦る花たちの姿を。

【木蓮】

毛系のシヨールに包まれたような蕾が割れて、紡錘形の白い花が咲く。木蓮は咲き始めがいい。花弁が開いてしまうと、どこか締りがなくなってしまう。一つ一つの花が大きいと、どうもそんな感じがしてしまう。

3月の終わり頃だったろうか。丁度、花の上の方が開きかかっていた。次の日には、わたしにとつて見頃の三分の一程度、開きそうだった。楚々とした婦人のような感じがとても好ましい。この頃に、強い雨が降った。風も激しく、咲き始めの花を散らしてしまつた。水に濡れて、白い花びらが所々褐色に変色して、木の周りに散らばっている。徐々

に、この褐色が広がっていくかと思うと、何か哀しい気持ちになった。

木蓮には、赤紫のものもある。これは妖艶な感じがする。ちよつと不実な婦人のような気がして、それ程好きになれない。だが、本音をいうと、そんな婦人に逢つてみたい。

季節は巡る。ひととせの後には、無慈悲な雨が降らぬことを願う。

【 桜 】

薄紅色の蕾がそのまま咲いて、ほんのりと淡い花卉をつける。一つ一つを見るよりは、木全体を、沢山の木のある並木を、桜は見るとものだと思う。

川堤に数十本の桜が植えてある。満開の

桜を対岸から距離を置いて見ていると、華麗という言葉を具象化すれば、こういうものなのだと思う。木のふわーとした柔らかなヴォリューム感。それが数十本、圧倒的なのだが、どこか優しい。

桜には、美しい言葉がある。『花筏』これは代表的なものだろう。今年、こんな言葉を知った、『花篝』（ハナカガリ）。夜桜を照らして見るための篝火だ。

辺りは暗い。待合わせの場所を、あの桜の篝火の下に決めた。女は夫ある身だ。初めてのことだ。時間に遅れた。女は多少不安になつていた。待っているだろうか。肩に散りかかる桜の花びらが、徐々に足を速くする。

やつと、向こうの暗闇に浮かぶあかい火が見えた。鼓動が高鳴る。何となくぼんやりと立っている人がみえた。女は足を緩めた。あの不安が妖しい微笑みに変わる。

こんな小説が書けないだろうかと思像してみた。すぐに、気が付いた。未経験者はダメだろうなあ。

【梶子】

小学校の頃から漢字が苦手だった。今も、それは続いている。特に植物名の漢字は読めぬものが多い。『女郎花』『百日紅』を初めて見て、読める人は天才だと思う。

知ってしまったら、どうということもないのだが、簡単な字であつても、なかなか読めな

い。この『クチナシ』も読めなかつた。

白い花に甘い香。花弁が厚くて蠟質な感じがする。葉もそうだ。いつも歩く散歩道にはこれが垣根のようになって、大量に並んでいる。こうなると強く迫られているようで圧迫感があり、どこことなく違和感があつた。それに、香も甘過ぎる。

どうもあの歌謡曲に影響されていたような気がする。あの歌詞がいけない。「小さな幸せそれさえも……」弱弱しく、儂げなイメージが頭の中に出来上がっていて、それとのアンバランスで、好きになれらなかつたようだ。

今年、垣根の盛り上がりのなかで、ふと奥

の方に一輪、密やかに咲いているのを見た。とても清楚な感じがした。そよと吹く風に乘つて、そこはかたなく甘い香がした。いい花だと思つた。

【紫陽花】

夜、雨が降る。夜が明ける。徐々に陽が射してくる。丸くなつた水滴が、花や葉に付いている。キラリと光つて、雫になり、地面に落ちていく。まつたく梅雨の定番な花だ。

色がこんなにも多いとは思わなかつた。紅・青・白・赤紫・桃、色とりどりだ。大きさもいろいろで、まつたく種類が多い。

ある詩人が「淡くかなしきもののふるなり紫陽花いろのものものふるなり」と書いてい

る。これに幻惑されたのか、透明なヴェールを被つた、そこはかたなく臙げないイメージを持つていた。大きな木の陰に、そつと咲くような感じを抱いていた。

今年、花壇にドッチ・ボールのような花が付いたものや、ソフト・ボールのような花が付いたものなどが、幾つも幾つも植えられていた。圧倒的なヴォリューム感。「淡いかなしさ」など、どこにもない。周りに植えてある別種の花たちは遠慮しているように、小さく見えた。

二人の男を同時に愛してしまつた女。幾ら考えても、一方に決められない女。惑う心は日に日に深くなり、ちぢに乱れる。雨

もよいの夕暮れ。葉陰に隠れた小さな紫陽花をじつと見ながら、佇んでいる。こんな短篇が書けたらと思う。

花は美しいものの代表だろう。例外はないと思う。ただ、美しく精一杯咲くだけ。誰のためでもない。咲くことを誰かに定められているかのように、萎れるまで咲き続ける。

美しいものを見て感じないひとはいないだろう。悲しいかな、美しさに気付かずにいるひとは多い。わたしもそのひとの一人だった。

見ているとその美しさから、イロイロなものをわたしは連想する。理想の女性に托してみたり、好きだったひとを想ってみたり、逝

つたひとを偲んでみたりする。そんなことが自然に出来るのは、花をおいてないような気がする。

花は咲きかけの時が殊に美しいようだ。若さの美しさというのだろうか。老いにも美しさはあろうが、輝かしさはないような気がしてならない。やはり、若さは美しさと同じ語なのだろう。

開きかけた花が、時の経過と共に、満開となり、萎れていく。この少ない時間が、またとても、いとおいしい。これはわたしの気持ちに投影されているからだろう。褐色に色変わる花に、哀しみが暮る。

パソコンの傍の窓から、外を眺めた。鈍色

の雲が一面に広がっている。「あ、窓に、水滴
が：」、雨粒がさつと一筋引いた。今日は散
歩に行けそうもない。

了



慟哭

水田竜子

トンネルを抜けると雨は上がっていた。列車から降りて空を見上げると、どんよりとした雲が垂れ込めている。今の心境に似ていると正子は思った。「ふうー」とため息をついて鞆を左手に持ち替えた。今からどこに行くのか、何をするかさえ決めかねていた。遠くには加賀旅館の看板が見える。

「待ったあ、ごめん。ごめん遅くなつて」

「いつものことだろ」

正志は苦笑しながら言った。正志の腕に手をからませながら、「歩こうよ」と言った。

ふたりが交際を始めたのが、一年半前。友達の友達だった正志と会った時、面食いの正子
は人目で好きになった。尽くすタイプの正子は、行く場所によつてはお弁当を作り、家に呼
んでは手料理をふるまつた。それが正子の張りとなり、充実した気持ちになれた。

会社でも、「正子何だかこの頃元氣ね。綺麗になつたし、いい人でもできた？」と同僚の朋子
にからかわれた。正子の気持ちはいつも明るかつた。今までは辛いと思つた仕事も、何とかや
れると切り替えられたし、我慢もできた。正志の存在が生活のすべてを明るく変えてくれ
た。彼の顔を見ているだけで幸せだつた。彼に会う前の日は心がウキウキした。この前も

「遊園地に行かない！今度。ジェットコースターに乗ろうよ！私大好きなの」

先週会つた時に正子はこう言つて困らせた。

次の日曜日、正子は約束どおりお弁当を作つて持つて行つた。

「ジェットコースター気持ちよかつたね」

「僕は微妙な気持ちだよ。ちよつと休もう」

ベンチに座つて取り留めのない話をした。彼といれば自分のすべてを出せる。それを優しく受
け止めてくれる人だと思つていた。

ふたりは次の日曜日に会う約束をして別れた。

次の週いつも時間に遅れる正子は、約束の時間よりも早く行つて正志を待った。

「正志さーん、ここよ」

「珍しいじゃないか、君が早く来るなんて」

「今日はドライブしようよ」

正子がハンドルを握り、お気に入りの音楽をかけて車を走らせた。

「地球の果てまで行こうか！」なんて冗談を言いながらドライブした。ふたりの気持ちそのまま、外は真つ青な空がどこまでも広がっていた。海を見たり、そのまま浜辺を歩いたり…夕暮れまで一緒にいた。

「じゃ、またね」別れ際に正志はキスをした。長い長い、キスだった。

それから一月後、待ち合わせ場所へと急いだ。「遅いなあ」いくら待っても正志は来なかった。携帯に電話しても、電源が入っていないか、電波の届かない…という機械音しか聞こえて

こない。

「何かあったのかしら」「そうだわ」前に一度だけ会社に電話したことがあったことを思い出して、かけてみた。女性の声で

「鈴木は昨日付けで本社に転勤致しました」

「えっ！！すみません」

と言いながら、何が起きているのか飲み込めないまま、電話を切った。不安で、不安でもどかしい気持ちのまま、次の日も次の日も過ごした。

そんなある日、郵便受けに正志からの手紙が入っていた。すぐに封を開けてみると、

すまない正子、突然君の前からいなくなってしまうて。それには訳があるのです。僕には妻も子供もいました。いつか話さなければと思いつつ、君に引かれていく僕には言い出せなかつた。君と会って別れてからいつも自分を責めていた。勝手だが、君と過ごした一年半は僕の人生にはかけがえのないものでした。君の笑顔を見る度に癒され、現実を忘れることができました。何と詫びたらいいのか……言えるのは僕を憎んでください、心からということだけです。

す。

頭が真っ白になった。手紙を読み終えた正子は、なかなか現実を受け入れることができなかった。妻・子供、この二文字が何度も、何度も心の中をかけぬけていった。手紙は手の中でぐしゃぐしゃになった。しばらく何も考えられないまま、明かりのついていない部屋にただ座り込んでいた。

気がつくと、外が白みかけていた。朝になるのを待つて会社に、体調の悪いことを理由に休暇願いを出した。長引きそうなので無理を言つて、四、五日休ませて欲しいと伝えた。

鞆にとりあえずの物を詰め、駅へ行き来た電車に飛び乗った。どこでもよかつた、とにかく正志と過ごしたこの町から離れたかつた。窓に映つた自分の姿を見ていると、憎いはずの正志の顔が浮かんできた。初めて涙がでた。あふれる涙をそつとぬぐい、じつと目を閉じた。

列車は海辺をぬけ、山浴いもひた走つて人気の少ない町に止まつた。正子はそこで降りた。さつきまで雨が降つていたのか、草木が濡れている。

憔悴しきつた心をこの町はどう受け止め、癒してくれるのだろうか……

あてのない旅にたつたひとり旅立つた正子であつた。



科学と思考

大西隆史

先日、街中で老婦人に話しかけられた。原発反対の署名をしてくれということだったが、そんなものに署名しないと断ると、非国民を見るがごとき目でねめつけられた。今や時流は原発反対、基地反対、増税反対と反対のオンパレードである。

何かに反対するということは悪いことではない。しかし、反対にも「理由」がいるのではないかと私は強く思う。さらに言えば、その理由は論理的に説明されて然るべきだとも思う。理屈に合わない、感情から来る反対は、少なくとも理知的な大人はすべきではないだろう。しかし、昨今の報道や反対活動では、都合の良い数字を切り貼りして作った「データ」を基に議論がなされていることが少なくない。そもそも、正しい理解に基づかないデータや数字などに単なる文字列以上の価値を見出すべきではないのだが、作り

手側が理解していない例は多々ある。特に原発事故に絡んだ報道や活動では、科学的に考えてあまりにも稚拙な屁理屈がまかり通っていることもあり、その光景にはある種の狂気すら感じることがある。

科学とは何かと問われると難しいものはあるが、私は論理だと考えている。間違いないことを積み重ね、それらの事象を無理なく説明できるようにすることが科学の一端であり、それを可能にするのが論理だからである。自分が納得できるできないは別として、そのものの価値を認めることもまた科学にとっては重要である。もしそれを放棄してしまえば、皆が自分勝手に主張し始め、引いては単なる政争と変わらなくなってしまうからである。

今後、日本がどのような展開を迎えていくのかは分からないが、論理的な根拠なしに突き進むことだけは避けたいところである。訳も分からぬうちに一方へ走ることが決して良い結果を生まないことは歴史が証明済みである。結局のところ、「良く分からないけど反対」「とりあえず賛成」などという曖昧な理由で物事を決めることをやめること

が大切なだろう。停止した思考で動いたときに幸せになったなどという例は古今東西ほとんどない話なのだから。

◆新読むだけ会員
森川紅さん。



〔俳句〕

白蝶の群れ

彩さい

華はな

紫陽花の花びらちぎつて恋占い

打ち明けずに過ぎた初恋 額の花

紫陽花に小さき足の見え隠れ

目が合えばにこりと笑う娘 濃紫陽花

遠目には白蝶の群れ 手毬花

幾年の色を重ねて手毬花



生ゴミ男

大西亥一郎

光月英雄ひでおは自分の名前にうんざりすることがある。光月ひでおだけでも、光り輝く月の光のようで、雅みやびで颯爽さうそうとした雰囲気がある。それに加えて英雄と来ると、男の代名詞みたいな気がする。

「ぜんぜんダサイ！ ひよろい！」と中学高校時代には、面と向かつて言われたこともあるし、「なんか、イメージが狂うわ」「草食より絶食系ね」と婚活の席では耳に入るように、わざとらしい声が漏れ聞こえて来た。

しかし光月英雄はニコニコしている。「いつも笑みを絶えさないの」と母親に口うるさく言われてきたこともあるし、実際そうし

ていると不思議といじめや深追いには遇わない。

何せ身長が一五八センチで、体重がどうかすると五十キロを切るから、これは細長い。食べても食べても太らない。痩せの大食いである。運動能力は父親譲りでダサイ。そこに母親のもう一つの口癖である「きちんとしなさい」が加わって、些か神経質過ぎるほど完璧主義である。もちろん完璧にできないから、スポーツにしろ勉強にしろ、少しやっつては投げだし、逃げ出す。そのくせ他人にはうるさい目をしている。

「あなたはよくできるのよ」「かしこいのよ」という教育ママのおかげで、かろうじて関西四大学といわれる私立の経済を出た。

偏差値が五八の学部というと、明治や中

央、青学、法政辺りと似たようなものだ。が、そこに合格するには同年齢集団の中で、上位二割以内にはいないといけない。だから、英雄は自分の頭は良く出来ると思っている。実際、文藝春秋や中央公論を読み、日経にも目を通す。父親が大学教授で、母親が高校教師、その間の一人息子である。

家庭的には問題なく、資産もあり、本人の学力もそこそこだから就職には困らなかった。K地方銀行に勤めた。融通は利かなかつたが、可も無く不可も無くこなせた。パソコンの表計算ソフトが得意で、メインシステムはタッチさせてもらえなかつたが、職場の便利屋さん程度ではあつた。

結婚は難しかつた。学生時代からだがいづも飲み会には出ているが、誰にも声は掛け

てもらえない。英雄が話しかけると義務的には応じてくれるが後は続かない。外見もどちらかというと陰気だ。「慢」が顔に出ている。少し話すと「よくできる」意識と、他人に完璧を求める自己中心が露骨に見える。もつとも浪費癖とか悪意とかはない。女が上手く操縦すれば大人しい種馬で給料配達人にはなりそうであつた。

光月英雄の三つ歳上、田村貴美子は三十歳を目前に焦っていた。

K銀行の同僚とは二人関係を持ち、上司とも関係があつた。同僚の一人の戸田祐次とは続いてはいたが、彼には妻子がいた。両親からは結婚を責められ、彼女自身も焦っていた。身長は一六四センチあり、すらりとした美人だつた。高卒で狭いワンルーム

に一人暮らし、遊びすぎていつの間にか歳を取っていた。

貴美子の目に光月英雄は入っていないかった。歳下、背が低く、ガリガリでダサイ。醜男。頭も少し薄くなりかけていた。出世の見込みはない。面白くない。そのくせ、話し出すと自己主張が強い。譲らない。趣味は自宅でもパソコンの表計算、それによるとアダルトビデオの収集が凄いだつた。同僚で彼からその手のソフトを借りて、お返しにデートをつきあつた子がいた。

「いやねえ、夜中一人でマスばかりかいているのかしら」

誰かが言うのでみんな吹き出した。意図はなかったのだが、貴美子だけがにやりとしながら言った。

「いいじゃない害にならないし」

「あら貴美子、彼に気があるの」

そんな風に言われたことがある。慌てて否定したが、改めて考えてみると、おもしろみはないけれど、光月と結婚すれば波風のない生活にはなりそうだった。

結婚など妥協と打算であると今では十二分に思っている。若い間は世間並みという意識と、性的要求から欲望を愛情と錯覚して、弾みで結ばれるだけのことだ。光月英雄は一人っ子だが、親元からは離れて、百二十平方メートルという家庭生活には不自由しないほどの広さのマンション住まいである。両親が大学教授と高校教師で、独立したら干渉しない主義らしい。邸宅と呼べるほどの実家は裕福で、父親のベンツも母

親のシーマも、財産はいずれ彼のもの、即ち貴美子のものになる。彼の乗るアウディもいい車だ。車とマンションだけで女などいくらでも付いてきそうなものだが、誰もいかなかった。セックスは興味だけ肥大しているから貴美子が誘導して適当に楽しめる。子どもは欲しい。母親にはなりたくない。英雄の頭脳ならそうそう貧弱ではない子どもだろう。体格は少し心配だが貴美子の遺伝子を受け継ぐに違いないと思っていた。(案外いい穴馬かも知れないわね)鼻筋の整った顔がぐにやりと揺れた。

「おいおい、本当か」

気^け怠^{だる}げな行為の後で戸田祐次の声が跳ね上がった。

「ちよつとおー、静かに！」

貴美子は唇に指を当てた。二ヶ月に一度くらい戸田と訪れるラブホテルの壁は薄かった。

「光月と結婚？」

戸田祐次は筋骨逞しい背を見せてベッドに半身を起こした。

戸田は光月と同期である。同じ大規模支店の男性同士だから仕事以外でも昼飯や飲み会で一緒になることが多い。親しいわけではないが、イヤでも会話も接触も多い。「まあ、くそまじめだがな」

吐き出すように言う。表計算のことは褒めてやれば、際限なく話し出す。簡単なパソコン言語も組めてセミプロ級だがプロではない。仕事はなんでも抱え込んで一人汗をかいている。貧相で華奢なくせに自尊心は強

い。話していると鼻持ちならなくなってきた、誰も友達はいない。薄紫色のたらこ唇、かさかさした皮膚の細い指。

（そいつが楽しむか）

起き上がってバスタオルのまま化粧台の前に立つ貴美子の後ろ姿を追う。形のいいヒップの下からすらりと伸びた長い足が続く。そのヒップと秘部に光月英雄の手や唇が伸びるかと思うと、胸くそが悪い。首筋が熱くなり、終えたばかりだというのに下半身が僅かに充血してくる。

貴美子との関係は二年近い。遊びだと割り切つてはいるが、それでも他の男に抱かれると思うと貪りの黒い雲がわき上がる。

戸田祐次は毛布を払うと、ベッドを降りて、貴美子に近づいた。貴美子はその気配を

楽しんでる。いつの間にか怒張したものを背後から貴美子に押しつけた。

「あら、元氣ね」

戸田祐次は貴美子の両肩に手を回して、振り向かせると乱暴に唇を吸った。バスタオルが床に落ちた。

（妻と別れてまでこいつと結婚する気はないが、光月にはもつたいたい）と思った。

貴美子は下腹部に男性を感じながら、新しい玩具の光月英雄になれるまでは戸田祐次とはちよつぱり我慢ねと、自分に向かつて心の中で呟いた。

光月英雄を釣り上げるのはいたつて容易だった。

親睦会の後、二次会になると、いつものことながら光月は誰からも誘われない。貴美

子は用がある振りをして仲間から外れると、帰りを急ぐ光月に追いついた。無言で駅への道を歩いた。背の低い光月の頭が透けて見えた。

彼のドキドキ感が伝わって来るかと思つたが、光月は茫洋と歩いていた。

貴美子は少し自信をなくしかけた。三十女になつたが、魅力は十分にあるつもりであつた。

「今日はずきあう気分じゃなかつたんだけど、なんだかもう少し飲みたくなつたわ」

貴美子は思いきつて言つた。誘つてくれと言う合図だつた。だが光月は何の反応も示さなかつた。

「強いんですねえ田村さん」

光月はそれだけ投げ捨てるように言つて

口をつぐんだ。

「そうだ光月君、飲みに行かない」

貴美子は後を続けた。

光月の歩みが止まって、不思議なものを
見るように貴美子の顔を見上げた。

「ぼくとですか」

一呼吸おいて掠れたような声を出した。

「ええ、いいでしょう」

「あ、あ、しかし」

「いいところがあるのよ」

貴美子は強引にいうと歩き出した。戸田祐次を含む何人かの男性と行ったことのあるシヨットバーだつた。

そこで貴美子は甘くて強い酒を飲んだ。酔うつもりはなかつたが酔つた振りは必要だつた。会話は貴美子の一方的な質問だつ

た。(面接しているみたい)と貴美子は思った。この男とは絶対に恋愛しないと思う。唯、所有してみたかった。

カウンターで光月の貧相な肉体に時折触れつつ、店を出ると、寄りかかった。光月がよろりとしたのには驚いたが、かまわず耳元で囁いた。

「ね、もうダメ飲み過ぎたわ、帰るの遠いし、泊めて」

光月英雄は、必死で動揺を抑えていた。歳上とはいえ、行内では肉体的な美人の一人である。頭も悪くない。明るいし友達も多い。接客も上手いし職員関係も上司の受けも良い。彼女と個人的に飲むなどと言うことは、その夜まで考えもしなかった。その上、男一人のマンションに泊めてくれと言う

ことがどういう意味をもつのかは、英雄にも判っていた。

二十七歳まで捨てたくても捨てられなかった童貞とサヨナラできるかも知れない。お金を払って性処理する気がないこともなかったが、その度に自慰行為で済み、そうするとわざわざ出かけることが面倒くさくなつた。性行為への期待とは裏腹に、その先の間関係のややよこしさがちらほら見えていた。しかし今は貪欲が頭の中を占領している。

体中にアドレナリンが放出されて、細い彼の腕の筋肉に力が入った。

初めての経験。何をしていいのかはビデオで知りすぎるほど学習している。もつとも一方では、紳士的に振る舞わねばとも思っ

た。彼女をベッドに寝かせて自分はソファで眠る。頭の中で欲望の瞳をぎらつかせたやせ衰えたオオカミと、か細い紳士が戦っていた。

市内のマンションにタクシーで乗り付けると、オートロックを解錠し、ふらつく彼女を室内に導き入れた。リビングダイニングは三十畳近くあり、七階の窓からは街の灯りが見えた。

田村貴美子はソファに横たえられつつ、整った室内を見渡した。この部屋だけで彼女はマンションの三倍ある。シーリングライトはライトブルーで、絨毯は多分薄い焦げ茶らしい。

「お水をいただけ」

貴美子はそう言つて光月英雄の後ろ姿

を見た。

痩せてはいるが案外がつしりはしていた。部屋の趣味も悪くはない。ここなら友達も呼べる。

驚いたことに光月は、よく冷えたミネラルウォーターをしゃれたグラスに入れて持ってきた。

鹿の子格子のグラスが青い光に踊った。

一息に飲み干すと、身体の中のアルコールが吹き飛んでいく。もともとセーブしつつ、飲んだ風に装っていただけである。

「ごめんなさい。無理を言つて」

「い、いえ……」

光月は慌てて、歩き出し隣室のドアをあけた。本棚とベッドが見えた。寝室兼書斎のようである。ベッドメーカーキングはキッチンとさ

れていて、彼の神経質さをよく表していた。

「あ、あそこでねて下さい。ぼ、僕はここで」

言葉がねつとりと欲望にまみれていた。

貴美子はグラスを光月英雄の手に戻すと、そのまま両手で彼の手を掴んだ。そして彼を見上げた。

光月英雄の中の貧弱な男性が目覚めた。かれは戸惑いつつ彼女の閉じた瞼をみて、唇を近づけた。

(愛してる)光月はそう思いつつ、不器用に唇を重ねた。

貴美子は釣り上げた手応えを感じつつ、彼の身体を受け止めていた。

光月英雄は悩んでいた。

元々痩せていたのだが、昨年来十キロ近くも減って、四十キロ前後になっている。身

長が一五八センチだから、誰が見ても痩せているという感じになった。

貧相な顔のほが更に落ちている。瞼が垂れているので表情はよく掴めない。

原因ははつきりとしている。胃ガンなのだ。

K銀行の集団検診で要精密検査の結果が出た。妻の貴美子には言わなかった。要精密検査などX線検査ではいくらでも出るし、痩せてきていたが、元気だった。痩せの大食いも健在であった。

「羨ましいわ」

貴美子はそう言った。

「いくら食べても太らないなんて」

そう言いつつ、パンを口の中に押し込む。

貴美子の体重も増えていかなかった。若い頃のままである。四十八歳には見えない。どうか

すると三十代後半に見えないこともない。結婚して女の子を二人産んで、今もK銀行の窓口に、週に四日は座っている。銀行のリターンプランで、寿退社をせず、出産後は一日四時間、週四日間の勤務でいい。もちろん日々雇用形態だが、組合との申し合わせで五年の継続が約束されていて、特段の事情がない限り首にならない。ボーナスも正職員の2割程度だが出る。貴美子くらのベテランで愛想が良く人当たりが良く美人ならば、銀行にとって御の字の職員を安く雇い続けることが出来る。

高二と中三の女の子は、英雄の両親の援助もあり、自分の実家の後押しもありで、随分と楽に育てられた。掃除・洗濯は週四回の派遣家政婦がしてくれたし、週に三日

はベビーシッターが半日見てくれた。保育園、幼稚園、私立の小学校からの一貫校と、子ども自身も楽に育っている。

貴美子は自分の選んだ道に満足していた。夫の風采が上がらないのは仕方がない。K銀行の支店長代理だが、代理は山ほどいる。K銀行では「代理」という名称で勤続年数の長い職員をなだめている。管理職ではないが月に二万の手当が出る。また外部に對しては「支店長代理」という肩書きの名刺が役に立つ。仕事でも私生活でも「K銀行支店長代理です」といえば一応の信頼が得られるわけだ。この辺りは各企業とも工夫していて、他の銀行では「副長」がこの支店長代理に当たるところもある。

給料は世間並以上出ている。なにより英

雄の両親からは一人っ子の彼と孫のために毎月二十万の振り込みがある。教員というのは自制が効いているのか、息子夫婦の生活に干渉しないし、将来世話になる気もないらしい。だから舅しゅうと 姑しゅうとめ に気を使わなくて済む。マンシヨンはもともと彼の名義であつたし、経済的には全く不自由していなかつた。

お互いK銀行勤務だが、夫婦は別支店配属である。英雄は相変わらず、窓口業務に使うパソコンソフトを触っている。無趣味なのは驚くばかりで、新聞や本は読むが、のめり込みはしない。賭け事はしないし、酒も晩酌程度だ。野球や相撲、近頃はサッカーを見ては「もう交代させろ」「引つ込め」「打て！」「ばかやろ」「ヘボ！」などとテレビ画

面に喚うつつんいている。人生の鬱憤うつつんのはけくちをスポーツ観戦に求めているようだ。確かに何を言つてもかまわない。

性的な関心は結婚当初こそあつたが、次第に遠のき、四十をこえる辺りからは無関心だ。妻の身体に飽きたのかも知れない。そのくせ、アダルトDVDの収集は未だに続けている。妻や娘に隠し続けているが、貴美子はそれが書斎の何処にあるかは知っている。貴美子の方も性生活はそう望まなくなっているが、男性に抱きしめられたいという欲望はある。だからいまだに戸田祐次とは続けている。彼はK銀行の大阪本店勤務で、逢うには都合がいい。自宅から離れているし、銀行業務にかこつけてでかけることが出来る。二ヶ月に一度というところだろうか。

別に愛情があるわけではない。欲望のはけ
くち。まあ獣に近い。人が齧^{げつし}歯目というネズ
ミから進化したものである以上、遺伝子を
残そうという行動は正常なものである。た
だ、人間は性欲が肥大化して、雄雌が互
いに征服欲の対象になっている。認められ
たい、快感を伴いたいというだけのものだ。し
てその後の嫌悪感や気怠^{けだる}さも知っている。
だが自分に女性としての魅力があることも
確認したい。

英雄は妻の行動に関心をしめさなくなっ
ている。

結婚当初こそ、「愛してる」と思っていた
らしい。男性も女性も若い間は、性的関心
を愛情と勘違いする。それは精神的幼さの
せいで、男性に多い。とくに異性関係がない

英雄などはその典型であつた。だがそれも
年月が経つと夢から覚める。

本来ならそこから、夫婦間の^{たお}癒やかな愛
情へと移行していくのだ。しかし、貴美子自
身が打算から始まり、そこから抜けきれな
いでいた。初めから壊れかけてはいたが、若
さという夢の殻を失つてみると、英雄の欠点
ばかりが目につくようになっていた。

その英雄は、検査結果に愕然としていた。
胃ガンは粘膜層から下層に達し、更に筋
層にまで及んでいた。幸いそれ以上の転移
はまだ見られないらしい。ただ、粘膜層の早
期胃ガンなら内視鏡手術で、ガンのみ抽出
も可能だ。が、筋層にまで達すると開腹し
て胃の摘出と言うことになる。開けて見て
酷ければ他臓器の摘出まで及ぶ。

「70パーセントは大丈夫です」

医者のはつきりと言う。英雄は細い目を更に細くして考える。つまり3分の1は危ないと言うことである。

死にたくはない。面白くもない人生だが、女の子二人の父親である。出来れば孫は抱いてみたい。多分、人生の意味を感じることは出来るはずだ。「もつとも、娘は父親と思つていないようだがな……」

自虐の笑いをため息と共に吐き出した。高二の長女も中三の次女も、父親を嫌悪している。生理的に寄せ付けないらしい。

それは妻の貴美子の影響でもある。

英雄が終電に乗り遅れてカプセルホテルに泊まろうが、疲れて帰つてこようが気にもとめない。事務的に食事を用意し、食べなけ

れば捨てる。会話は殆どない。一緒に出かけることもない。学校の懇談会は貴美子の独壇場で、娘の成績さえ聞かなければ教えてもらえない。夫を馬鹿にしているのではない。無視しているのである。

その責任の過半が自分にあることも英雄は判っている。理解しているから余計に何も言えない。今更生き方が変わるわけでもない。第一言つたところで、貴美子の口にはかなわない。それどころか体力的にさえ負けるかも知れなかった。

「俺には夢がないからな」

そう思う。男の魅力はキン肉マンでも知性でもない。イケメンでもなければスポーツでもない。音楽でもなければ文学でもない。それらを手段として夢を追うことである。

結果が伴えばいいが、結果が出なくてもかまわない。病であろうが怪我をしようが、落ち込むことがあるうが人生を前向きに進む、伴侶や家族を巻き込まなくてもいい、夢への風が身体に纏わりついていること、それが大切なのだ。

「俺はいてもいなくてもいいわけか」

そんなものだろうと思う。単なる種馬。世間並み以下の亭主。金づる。それがよくわかっているから、英雄にとつても貴美子はいてもいなくてもいい存在である。だが世間並みの「きちんとした」家庭は持ち続けた。形だけの夫婦。

そのくせ、英雄は貴美子の不倫には嫉妬している。結婚当初は、女性の肉体が恋愛という言葉とイコールであった。が、夢から

覚めてみると女性や妻、母親としては兎も角、性的魅力という意味では「これほどいい女が」自分の妻になったことにすぐに違和感を感じていた。そういう目で妻の行動を見てみると、不倫はすぐに判った。証拠があるわけではないし、それを積極的に調べて暴き立てる気もなかった。ただ感じていた。戸田祐次の時折見せる下卑た表情の意味することも判っていた。

妻を寝取られている場面を想像するだけで頭に血が上り、下腹部が熱くなつたが、そうかと言って妻を詰問きつもんすることもしなかつた。妻に向かうと男が萎なえた。

(惨めな男だ俺は……)

誰からも期待されないのであるではない、最早無視さえないような毎日だった。無視

は存在を前提とするが、彼は存在していないかつた。

K銀行でも、殆ど相手にされてはいなかった。いてもいなくてもいいが首には出来ない。大きなミスもないが役にも立たない。

英雄がいくら痩せようが、妻も娘達も気にしていなかった。彼は視界に入っていて、しかも見えない存在であつた。

「あら、お父さん薄い」

長女が言つて笑う。英雄のますます薄くなつてきた後頭部だけが、長女にとつての父親だつた。次女と妻の視線が集まり、クスツと言ふ笑い声が、耳の側を通り抜けた。

「おじさん臭い……」娘二人がそう呟いて英雄を見る。その時には彼は、臭いとして存在している。

胃ガンだと言つても、驚くには違いないが、誰も彼のことを本気で心配してくれそうもなかつた。両親もリタイアして、それぞれが海外旅行や趣味に没頭している。考えてみると彼の父母もまた、互いに割り切つた人生を送つてきたのかも知れなかつた。血が薄いのではない、縁が薄いのである。それはそう言う縁しか作れない人間に因があつた。

「おれもそうかも……」

英雄はサニタリーで改めて自分を見た。なるほど瓜実型で貧相な顔だ。生き方そのものが出ているようで生気がなかつた。

「あなた。ゴミ出し忘れないでね」

妻ががなつている。

「ゴミは俺か……。臭いを放つから、気づかれて嫌われる生ゴミか……」

英雄は台所に戻ると、引き出しから出した白い不透明のビニールのゴミ袋を持ち、サニタリーと、書斎と、娘達が廊下に出したゴミを詰め込んで回つて、最後に台所のゴミを入れた。何かのクッション類や小冊子類も入っている。相当に膨らんで、重たい。H市のゴミ袋の指定品は七十リットル入る厚手のもので、とがった角が当たらない限り十キロや二十キロ程度では破れない。それでも途中で破れては困るのもう一枚予備のゴミ袋を手にした。

六時四十分というのは、このマンションの空白時間である。六時半をピークに人が出て行き、次のピークは七時過ぎになる。

「行つてきます」

誰も返事しないのを判つていてそう言う。

鍵を掛けて廊下を進みエレベータに乗り込む。「一階」というと「一階」に参ります。扉が閉まります」と合成音が響く。無機質な音波が木霊するに過ぎない。機械は音に反応しているだけで、彼に答えているわけではない。だが、何も言わない人間よりはましだ。「俺は、生ゴミか、それも饅^すえて傷んだ生ゴミか」

それだけが頭の中を回る。

ゴミ置き場に立つ。百戸余りあるマンションだが、まだゴミ袋は十数個ほどである。

ゴミを置いて、左手の予備のゴミ袋が邪魔になった。

白地の袋に「生ゴミ・燃えるゴミ・H市」と赤字が踊っている。

彼はゆつくりとそれを広げた。改めてみて

みると大きなものだ。通常の四十五リットルより幅も長さも十センチ以上長い。

「生ゴミ・燃えるゴミ……」

英雄は口の中でモゴモゴと呟き、焦点を失った目で赤い文字を見つめてから、ゆつくりとゴミ袋の口を開いた。

数個のゴミ袋を手前によけて、置かれたゴミ袋の真ん中に空間を作ると袋を置く。靴を脱いで、ゴミ置き場のブロック塀の外に投げ捨てた。コンクリートの冷たさが綿の靴下を通して伝わってくる。ゴミ袋に右足を差し込んだ。それから左足を入れても十分な面積があった。

「起きて半畳、寝て一畳じゃなくて、生ゴミ一個の存在だな俺は」

笑いがこみ上げてきた。

袋の中にかがみ込んで、自分を包み込んだ。視界が遮断されて白一色になった。袋は十分な長さがあって、百五十八センチのかがみ込んだ光月英雄を飲み込んで余裕がある。頭の上で袋の端を中に引き込み、結んだ。

そのまま後ろに持たれた。回りの生ゴミ袋は適度なクッションがあつて、あじさいの季節の朝の冷気も押しとどめていた。

街の音がざわめきとなつて伝わってくる。いくら体重が四十キロを切るか切らないかといつても、このままでは誰かが気づくだろう。

「見つければ、ちよつとおかしいんじゃない、くらいは言われるだろうな」

貴美子と娘達の困惑した顔が浮かぶ。

英雄は変人になり、少しは無視から逃れられるかも知れない。貴美子は離婚はしないはずだ。英雄の両親の財産はまだ手に入っていないし、娘にもお金がかかる。

見つからなければ、ゴミの収集員が気づくに違いない。二十キロくらいならば兎も角、流石に男一人は重いに違いない。十八リツトルの石油缶二つ以上である。それよりなにより感触ですぐに判るだろう。

「肉食男子どころか草食男子も想像できない、生ゴミ男子で有名になるかも知れないな」

英雄は袋の中で微かに笑った。

頭の上にはずしりと衝撃があつた。外の足音に気づかないでいたら、誰かがゴミ袋を投げ捨てたようだ。置いてあるゴミ袋群の中

心に投げ入れれば、袋は安定する。

生ゴミでよかつた、と英雄は思った。電気製品やその他のゴミなら、悪くすると頭に怪我しているかも知れなかつた。

続いて三つ、回りにゴミ袋が落ちた。七時をこえて、出勤がてらにゴミ出しが始まつたようだ。

「ゴミ収集車が来る九時までは見つからないか……」

朝の挨拶と、季候の挨拶が聞こえると、ゴミ袋が溜まっていく。もうすっかり英雄の入つたゴミ袋は見えなくなっているはずである。

英雄は両手を挙げて、落ちてきたゴミ袋を押し返してみた。といつても肘を少し曲げる程度にしか広がらない。それでも空間が大きくなると、気分は楽になる。手を下ろ

せばまた潰れるので、片手ずつ押し上げておくことにした。

人がこの世に占める位置は、時間軸と空間軸の交わったところだ。英雄の時間軸は四十五年である。頭の中で時間を線のように思い描いてみる。無窮の過去から無限の彼方に続く大きな宇宙の中では極めて短い線である。しかし、それが唐突に現れて突然、死でもつて消えるというのは、イメージとして妙だ。破線か一点鎖線かは知らないが、前後につながりがあり、それは両親や貴美子や娘達、大して多くはないが、それでも数え切れない人間との交点を持つているのだろう。ま、それにしても英雄の時間線は、線そのものが細いに違いない。空間の広がり幅が少ないからである。

「今の交点がこのゴミ袋の中だけというのは、俺らしくていいか」

どうも最後は自嘲的になる。もつとも、人間は糞袋ともいうから、生ゴミ袋と同じ事である。誰でも結局はそうかも知れない。

貴美子と戸田祐次の絡み合う姿が一瞬浮かんで、それがたちまち生ゴミ袋が二つ重なる光景に変わった。クツと含み笑いをした。淫靡な光景は捉え方を変えると滑稽さに転ずる。だが、それはボスザルにメスザルを盗られた、哀れなはぐれオスザルの戯言たわごとのようでもあった。笑い顔が引きつった。満たされない性的貪りと、戸田祐次と貴美子への瞋しん恚のほむらが燃え上がった。

「惨めな話だ」

奥歯をかみしめると涙が滲んできていて、

つくづく自分の小心さ、愚かさ、自身への嫌悪感となつて迫ってくる。

大きいため息をついた。

ふつと腕が伸びて、頭の上の空間が少し広がった。上から積まれた生ゴミの位置が変わつて圧力が減つたのかも知れなかつた。

腕時計を見ると八時半を回り出している。K銀行の出勤時間は八時十五分。打ち合わせがその後十分間ある。遅刻者も大抵この間には来るので、「電話もなしに遅刻か」と同僚も上司も思い出しているに違いない。

もつとも英雄などいてもいなくても業務に大した支障はない。代わりはいくらでもいる。ただ、彼の急ぎの仕事を被る者はずんざりしているだろう。仕事が増えることもある

が、英雄のファイルは彼にしか判らないような記述がやたらと多い。標準化されていない。英雄は仕事をこねくり回して自己陶醉する。している気分には上司の決裁がある。残業も多い。残業するには上司の決裁があるが、彼のファイルを見て説明を受けると、呆れた顔をして「判りやすくない、短時間だぞ」と念押ししながら印を押す。仕事を自分で作りそれに溺れているのだ。

困ればいい、と英雄は考えている。俺にしか判らない記述、やたらとリンクしあるいたデータベースは、外部の者には意味不明である。

がそれも虚しい気がする。彼がいれば、それを触りはしないだろうが、いなくなれば「こんな無駄ばかりしやがつて」の一言で廃

棄されるはずだ。

「ははは、ははは」

光月英雄は生ゴミ袋の中で笑い出した。

そしてぎよつとした。

声が小さい。耳に届かない。

交代にあげた右腕が、すつと伸びて、空を

掴んだ。

「あ」

英雄は声にならない声を出した。

内向きに結ばれたゴミ袋の天井が、伸ば

した腕の指先から更に遠い。上からの他の

ゴミ袋の圧力が、彼の入るゴミ袋の空気を

押し込んでいる。

「なんだ…」

身体の周囲の空間がふわりと拡大して、

ゴミ袋が両肩から離れている。

そんな、と言おうとして、彼はゴミ袋の底にひっくり返った。誰かがまたゴミを投棄したようだった。

彼は縮んでいた。ぎりぎりに包まれていた

はずのビニールの壁は、トイレほどの空間になつていた。

なつていた。

「ばかな…」

英雄は起き上がって自分の手足を見直

した。何も変わっていないが、着ている洋服

ごと小さくなっている気がした。いや事実小

さくなりつつあった。

生ゴミは、腐乱し、分解し、小さくなつて

いく。時間軸と空間軸は共に急速に収縮

し、交点の存在である彼も空間の一点に凝

縮されるのかも知れない。

それにしても、俺は生きている、と英雄は

ブルツと身体を震わせた。幼児くらいの大きさには違いない。風船の中に入ったゴムボールくらいだろう。が生きているのだ。

「冗談じゃない、これは悪い夢だ」

ゴミの収集員に発見されて、笑いものになるだろうと言った話ではない。このまま縮んだとしたら、ひよいとつまみ上げられて、ゴミ袋のまま収集車に投げ込まれる。頭でも打つか、そのまま投げ込まれて……

英雄はゴクリとつばを飲んだ。

ゴミを圧縮するごつい鋼鉄の溝の先が、身体に食い込む姿が見える。ひつかからずそのまま中に滑り込むと、四方八方から生ゴミに圧迫されて潰される自分が見える。俺はそんなに悪い人間か、いや、わ、悪い、生ゴミか……英雄の頭も腐乱し始めている

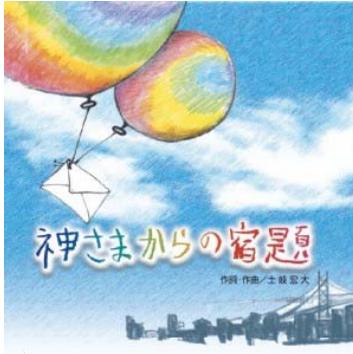
のかも知れない。

遠くから、疍高いトラックの後退音が響いてきた。

収集車が滑り込んできたようだ。



筋肉が骨になる難病 (FOP)



◆ 筋肉の細胞が骨に変わる「進行性骨化性線維異形成症 (FOP)」という難病があります。

明石でも魚住中3年の山本育海君がFOPです。

◆ 2008年2月、育海君を支援する団体「FOP明石」が発足し、ブログで育海君や病気の情報を発信し、治療法開発につながりそうな活動を続けています。この活動などで、07年にFOPは難病に指定されました。

「神様からの宿題」は育海くんの書いたお話が絵本になったもの。またイメージCDやライブ活動、絵本の日本語版及び英語版のiPhoneアプリも完成しました。

◆ 治療薬の研究費にあてる募金も行っています。ぜひ、ご協力下さい。

◆ 問い合わせはFOP明石事務局

(080・3775・2257)

◆ 絵本やCDの販売も行われています。詳しくは下記HPでご確認下さい。

◆ <http://www.fop-akashi.jp/>



アクトス写真館

航空写真 1964年 昭和40年3月発行 明石市要覧

中央の折り目、真ん中の黒い部分が明石城・明石公園です。

左の河が明石川です。ご覧のとおり今から半世紀前は、明石公園から北、また明石川までが市街地です。跡は開発中か畑や田んぼで何もありません。

人口は昭和40年で約16万人。昭和20年が8万4千人ですから急激な膨張の最中です。といっても粗っぽく現在の約半分です。

しかし最近、とうとう人口が減少しはじめました。夢であった30万都市にはどうやら到達しそうもありません。

日本全体の人口が減りだしてはいるのですが、大都市圏は増え続けていますから、明石の魅力が神戸市等に比べてなくなつて来つつあるのかも知れません。私が神戸市から明石に移り住んで33年、第2の故郷です。私の子ども達や孫達にとっては故郷ですから、是非とも発展して貰いたいものだと思います。

◆ ショートショート

◆ 明花さんから提案頂いたコーナーです。俳句や短歌・川柳・詩などはコーナーに入れませんが。最長は2000字くらいまでとしました。一応、コーナー対象であることを明記してお送り下さい。判断についてはこちらにお任せ下さい。

ことぶき大学

高阪博一

何を血迷ったのか、入学してしまった。入学資格は六十歳以上だ。老人福祉の一環なのだろう。各市町村で、名称は違っても、同じ様なことをしているようだ。

行つてみて驚いた。男性が結構多いのだ。クラス二十四名中十四名が男性だった。男性も、六十を過ぎ定年となつて、毎日日曜日で家にいると、お友達が欲しくなるのかもしれない。大学の名称には、以前から、何となく違和感があつて仕方がなかった。「なんで、『ことぶき』なん？」 長く生きることが目出度いことなのだろうか。特に不幸なことだとは思わないが、かといつて幸福なこととも思わない。

誕生して、生きて老い、そして死ぬ。命とはその循環を指すものだろう。そう考えると、老いは自然なことだ。その自然なことに、価値判断を示す言葉は不要な気がした。

そうすると、どんな名称がいいのだろう。たそがれ大学、ちよつと、暗そうだ。じゅんかん大学、観念的過ぎるようだ。いつそ、あみだ大学でどうだろう。皆一緒に極楽へ行けそうだ。むむ、何処からか、ブーイングの声が聞こえてきそうだ。

了



◆ご紹介

会員の中には、各種の文芸団体に属している方がおられます。また、雑誌や新聞に投稿されたり、いろいろな文学賞に応募されている方もあります。編集子の知る範囲で、その組織などをご紹介しておきます。アクトスを第一にしていただけと嬉しいのですが、もし興味がありましたらどんどん参加・応募して下さい。もちろん、そのために頑張る必要も出てきますが、そのことで自分を奮い立たせる、書く機会を作る、書くように追い込むと言ったことも期待できると思います。

①神戸新聞文芸

〒65018571

神戸市中央区東川崎町1の5の7

神戸新聞(編集局)

◆神戸新聞社の文芸募集です。私ももう二十年近く前に児童文学に応募していました。5回入選しました。退職後は随筆が入選しました。入選すると2万円ただけで、新聞に作品が載ります。原稿用紙10枚のものでしたから読みごたえ(載りごたえ)があります。今は新聞を取っていませんので、ジャンルが変わったりしていると思います。応募先も組織が変わっていると思いますので、新聞紙面で確認されて応募して下さい。

他の新聞でもあるかも知れません。ご存じの方はまたお教え下さい。

◆どの新聞にも読者からの意見を載せる「読者欄」といったページがあります。掲載されますと、図書券がいただけたりします。(私はその昔、毎日新聞に掲載されたらバスタオルをいただきました)アクトス会員の方の中には応募されて掲載された方も多くおられます。みんなの共感が得られる内容、短い文章で簡潔に伝わるように書いてみて下さい。

次は神戸新聞の「発言」欄のウェブ上の受付です。ネットをされる方は、この方法なら便利です。但し、打ち込んだら時間をおいて確認し、出来れば打ち出して校正して下さい。手書きの場合ならあまり犯さないう、誤字脱字をしてしまうことがよくあります。

〒650-8571

神戸市中央区東川崎町1の5の7

神戸新聞編集局「発言」係

★神戸新聞紙面の読者投稿「発言」欄の受け付けコーナーです。

★全項目にもれなく記入して下さい。

★半角のカタカナは使用しないでください。

★字数は400字以内でお書きください。

★段落以外に改行を入れないでください。

★趣旨を変えない範囲で書き直すことがあります。

★他紙との二重投稿はご遠慮ください。

★投稿文はメールの添付文書にしないでください。

② 明石ペンクラブ

「明石ペンクラブ」はアクトスの大先輩といった組織です。「明石大門」という雑誌が年に1度です。70人くらいが在籍しておられます。「お誘い」を見ますと、入会金千円、年会費千二百円、例会参加の場合三百円、作品集に作品発表の場合は若干の負担金となっています。入会などの連絡先は、次のとおりです。

〒673-0883 明石市中崎2の4の1の402 山中幸義様方

電話 078(913)9701

③ 各新聞紙「俳句などの短詩形欄」(業界紙・ミニコミ誌)

アクトスでも応募されている方がおられます。俳句や短歌、川柳というのはどの新聞社でも選者を依頼して、毎回、入選した方の作品が掲載されています。よく存じませんが、流派があつて、媒体により選者により傾向が違ふようです。それを調べられて応募される方が効率的だと思います。

④ 半どん

半どんの会「兵庫県下に在住もしくは兵庫県にかかわりのある芸術家と、芸術を愛好し、芸術文化の普及向上に理解をもつ人々による、会員相互の親睦と、郷土芸術文化の交流と振興に寄与することを目的とする」という団体です。文学だけでなく書道や踊り、美術工芸など多様な方が在籍し、県下各地

に支部があります。「文化賞」が創設されています。年会費は3000円で雑誌「半どん」は百数十号になっています。作品は事務局が依頼して掲載されているようです。最新号が手元になく事務局は次のところになっていますが、変わっているかも知れません。

〒67510022

加古川市尾上町口里690の1

松尾茂夫様方 半どんの会事務局

⑤子午線

東播磨文化団体連合会の機関誌が「東はりま文化 子午線」です。各市町の文化団体の連合体です。連合体ですので個人会員というのはありませんが、年に1度の作品募集は各団体への依頼だけでなく、一般公募もあります。郵送料のみで費用はかかりません。ぜひ、応募されてみて下さい。

事務局

〒67311415 加東市下久米1227の18

公益財団法人兵庫県いきがい創造協会

嬉野台生涯教育センター内 東播磨文化団体連合会

文芸誌「東はりま文化 子午線」発行委員会

電話0795(44)0711

⑥明石市文芸祭

市の文芸祭です。次は市のHPからの転載です。データでの応募も部門によれば可能なようです。

【応募部門】 俳句・川柳・短歌・詩・随筆・小説・児童文学

【募集期間】 平成24年6月1日(金)～7月31日(火)

【応募料】 一人1,000円(中学生以下無料)

※複数部門応募の場合でも一律1,000円です。

※作品応募票と応募料を同封し、下記あて先までお送りください。

郵送の場合、郵便小為替または現金書留でお送りください。

【応募規定】 俳句・川柳・短歌部門 ⇒ 各部門一人二句(二首)まで。指定の用紙に記入
詩部門 ⇒ 本文400字詰原稿用紙 1枚以内

随筆部門 ⇒ 本文400字詰原稿用紙 5枚以内

小説部門 ⇒ 本文400字詰原稿用紙 12枚以内

児童文学部門 ⇒ 本文400字詰原稿用紙 10枚以内

【注意事項】 1 応募資格は問いません。

2 作品は、未発表・オリジナル作品に限ります。

3 下記作品応募票を同封してください。

4 複数部門応募される場合も、作品応募票は一枚で結構です。

5 文字は楷書で、難読語、特殊な読みの語、固有名詞などにはふりがなをつけてください。

6 応募作品は返却しませんので、必要な場合は事前にコピーをおとりください。

⑦神戸市民文芸 「こうべ市民文芸」の発行(隔年発行)

市民の文芸活動の発表の場として、昭和49年(1974年)に始まった。当初は市民文芸誌「ともづな」で昭和60年(1985年)まで13巻を発行した。現在は、短歌・俳句・川柳・詩・短編またはエッセイの5部門で、神戸市および近郊の市民から作品を募集し、入選作品を掲載した文芸誌を発行している。

公益財団法人 神戸市民文化振興財団

〒650-0017 神戸市中央区楠町4丁目2-2 神戸文化ホール内

電話：078-361-7105

隔年のようですが、前回募集が22年10月末〆切でしたので、今年は作品募集年かも知れません。

◆各市町でもいろいろな文芸募集があると思います。神戸市の募集を見られればわかりますが、神戸市及び近郊の市民ということで、ひろく募集されているようです。

もちろん、市が全国的に募集するような「○○文学賞」もあるようです。出版社の文学賞も含めて、公募ガイドとかネットでも探せると思います。

応募のためには書きますから、訓練と、書き上げた作品が溜まることになります。入選すればラッキーという感覚で頑張ってみて下さい。

平成24年(2012年)7月

アクトス会員(順不同)

大西 亥一郎

柴田 秀夫

小川 悦子

塩見 伸介

瓜生 八頼子

大西 裕子

沼田 知子

高阪 博一

土谷 智子

皿谷 文雄

大西 隆史

[読書会員]

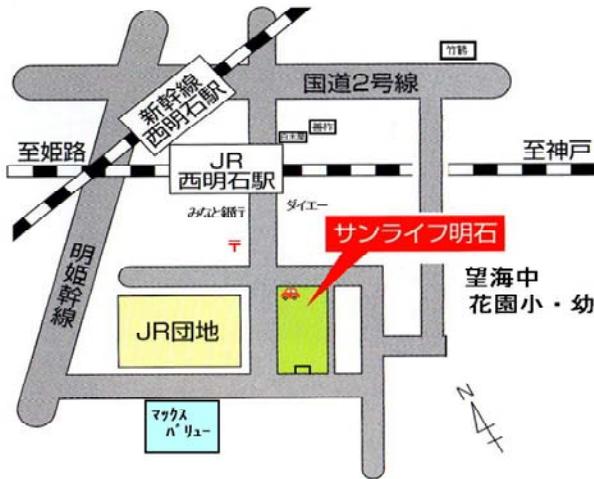
佐藤 俊明

佐藤 由紀子

山端 早百合

太田 エミ

森川 紅



◆ 中高年齢労働者福祉センター
(サンライフ明石)

〒673-0041 明石市西明石南町3丁目1-21

電話078-923-0770

◆ 合評会(例会)は、中高年齢労働者福祉センター(サンライフ明石)(上図・所在、連絡先)です。奇数月・第3土曜日、1時半からの予定です。改めてご連絡しませんので、参加される場合はご注意ください。●手帖などにお控え下さい。●出欠のご連絡は不要です。

サンライフ明石は

国道2号線では、「竹鶴」前(信号あり)を南下し跨線橋を越えて下さい。

明姫幹線ではマックスバリユーを目標にどうぞ。

建物北に駐車場あり。建物入り口前に駐輪場。建物東にバイク置き場あり。

南が入り口(入つてすぐ左手で上履きにはきかえて下さい。会場は2階です。)

編集室から

①次号(第16号)の原稿締め切りは9月末必着です。

②前ページにありますように、例会場は、サンライフ明石です。

変更・中止等の場合はHP掲示板、メール等でご連絡いたします。

七月例会は14日(土)

※既に連絡しましたが

21日から変更しました。
ご注意ください。

九月例会は15日(土)
十一月例会は17日(土)

です。

※なお十一月で、例会は40回となります。

③HPに、15号までを、PDFと一太郎ファイルで掲載しました。

<http://www.justmystage.com/home/actos2008/>
(ネット検索の窓から「文芸□アクトス」といれて探されても出てきません。)

④今年には節電の夏となりそうです。大飯原発は稼働しました。政治家にリーダーシップが欲しいですが、私たちもまた、一人ひとり、自分の責任を考えなければならぬのかも知れません。

「亥一郎」

◆入会するには◆

- ①会費1年分(12000円)を下の振込先に振り込み
- ②〒住所・氏名(フリガナ)・年齢・職業・電話・メール
を明記の上、※振込用紙の通信欄記載でも可
〒673-0031 明石市宮の上1の17の614
大西方 アクトス編集室 へ、お送りください。

※**読書会員の場合 年会費は3200円です。**

4回、各1冊お届けします。(送料含む)

◆会費等振込先◆

郵便局

口座:00900-5-39616 大西 生一朗

※記録が残りますので、振り込みして下さい。

◆合評会

奇数月第3土曜日

※午後 1時半、

◆場所

中高年齢労働者福祉センター

(サンライフ明石)

〒673-0041

明石市西明石南町

3丁目1-21

電話 078-923-0770

※JR西明石駅南、徒歩3分

(新幹線西明石駅南徒歩5分)

※明石市立望海中学校・花園

小学校の西、徒歩2分

- ◆ アクトスに参加下さい。携帯メールかインターネットがあれば、海外からでも参加できます。
- ◆ 例会に参加できなくても、HP・掲示板などで状況を知ること可能です。
- ◆ 少しずつ書きためて人生の足跡を刻んで下さい。
- ◆ ペンネームで発表できます。

 加入方法は前ページをご覧ください。

アクトスHP

<http://www.justmystage.com/home/actos2008/>

アクトス 第15号

平成二十四年八月一日

編集 大西亥一郎

発行

〒673-0031

兵庫県明石市宮の上

一の十七の六一四

大西方

大和評論社「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品（頒価）800円